

精神科実習における看護学生の偏見への影響

徳永 順子・池田 敏子・中西 代志子

The effects of psychiatric practicing on a prejudiced idea against mental patients.

Junko TOKUNAGA, Toshiko IKEDA, and Yoshiko NAKANISHI

We investigated a prejudiced idea of nursing students against mental patients before and after psychiatric practicing. On investigation we found the following facts.

- 1 Before psychiatric practicing, 84.1 percent of nursing students had a prejudice against mental patients. Those students thought that mental patients were fearful and could not communicate with students.
- 2 After psychiatric practicing, 48.8 percent of nursing students put prejudices.
- 3 After psychiatric practicing nursing students understood that mental patients are the same as people in general.

Key Words : 精神科実習 看護学生 偏見

はじめに

当短大では2年生で精神医学及び看護を講義で学び、3年生で2週間の精神科実習を行っている。その実習で心の病をもつ患者を理解し、「いかなる場面においても患者を人として尊重することができる」ことを目標のひとつにあげている。実習前の教官オリエンテーション時の印象から学生は精神障害者との関わりを今まで殆どもっておらず、また、精神疾患をもった患者を想像することは難しく様子を理解しにくいと感じている者が多かった。更に、事件報道との関連性で精神障害者は恐いとか危険性を感じている学生が若干いた。それでは、実際に患者を受け持ち実習を行うことは学生にどんな影響を与えるであろうか。学生が考える偏見とはどんな内容なのか実習の偏見に対しての影響はどうか等の概観を調査してみることにした。その結果若干の知見を得たので報告する。

研究方法

1. 調査期間：平成4年4月～12月
2. 調査対象：3年生82名（全員女性）
3. 調査方法：精神科実習直後に調査用紙を配布し記入後回収した。（回収率100%）

偏見についてはある、ないわからないのうち三者択一により、偏見内容・実習による変化については記述してもらった。無回答・二重回答等は省略する。

結果

1. 実習前後の偏見について
実習前に偏見があった学生は69名(84.1%)なかった学生は7名(8.54%)、わからない学生は5名(6.10%)であった。実習後に偏見がある学生は8名(9.76%)、ない学生は47名(57.3%)、わからない学生は24名(29.3%)、であった。
2. 実習前後の変化について
実習前後で変化があった学生は65名(79.3%)、

変化がなかった学生は14名(17.1%)であった。その内訳は変化のあった学生については「偏見があった」が「偏見がない」に変化した学生は40名(48.8%)、「偏見があった」が「わからない」に変化した学生は21名(25.6%)であった。次に、変化がなかった学生14名については実習前後共偏見がある学生は7名(8.54%)、偏見がない学生は5名(6.10%)、わからない学生は2名(2.44%)であった。

3. 実習前の偏見内容について(偏見があったと書いている学生69名の記述内容で人数は延人数で表わす)

実習前に学生が考えていた偏見とは怖い・恐ろしい感じ(イメージ)34名と最も多く、次いでコミュニケーションがはかれない・会話にならない・こちらの言うことを理解できない・わかしてもらえない20名、暴力的・襲ってきそう・暴れる・狂暴・暴力をふるう20名、泣き叫ぶ・叫ぶ・大声を出す・喚く11名、考えられない行動をする・変な容貌・反応がない・感動がない・人格崩壊をきたした人・挙動不審8名、危険な人・危害を加えられそうな・危険なことをする7名、一般の人と違う・普通がない6名、何をするかわからない5名、暗い・淋しい・冷たいイメージ5名、わけのわからないことを言う3名、近づきたくない3名、不活発・閉じこもったようにしている3名であった。

以上から実習前に学生が考えた偏見内容は怖い・疎通性がない・暴力的・叫ぶ・危険な人というイメージが多かった。

4. 実習後変化した内容について(記述内容は延人数で表わす)

1)「偏見があった」が「偏見がない」になった学生40名の変化した内容を挙げると、普通の人と変わらない・私と同じ人間・話は普通にできる15名、精神疾患は他の病気に比べ精神的な内面のことを悩んでいるからはかりきれない思いがある・自分の精神障害について一生懸命考えている・純粋な心を持っているから現代に適応できず戸惑っている・私達と共通する感情面も多くあり妄想などその一部分に過ぎない・自傷行為も見ただけその行動や言葉が自分の苦しみを表現する手段の一つ

になっているかなとわかった気がするなど14名であった。自分で問題を解決する方法を導くことができなほどデリケートで心優しい人達だとわかった・思いやりのある人が多い・時には不穏となるが人にも気を使うし明るいし協調性があるなど8名、怖いという思いが消えた・怖い所ではない・むやみに暴力をふるう人はいない・人には危害を与えないなど7名、実習前に思っていたことは偏見だった・自分が思っていたことは誤解だとわかった・偏見を持っている人を説得できる程気持ちが一変したなど5名であった。

以上より「偏見があった」が「偏見がない」になった学生の変化した内容は、普通の人と変わらない・話は普通にできる・病気は一部分である・デリケートで心優しく思いやりのある人が多い・恐くないし暴力もふるわないが多かった。

2)「偏見あった」が「わからない」になった学生21名中記載のあった20名の変化した内容を挙げると独語や奇声をあげる人も病気のための症状であり根は気が弱くて傷つきやすい人が多い・優しい心を持っている人が多い・相手のことを思いやる人が多く怖い感じはなく非活動的な感じを受けた・患者の方が学生に気を使って話していて拒否などはなかった・どんな人でもじっくり話せばわかるものだなあなど9名が答えていた。患者は自分の将来のこととか考えていて普通の人と変わらない部分が多い・私達とそれほど変わりなく正常な部分が殆どで共通点がたくさんある・自分のことをきちんとわかっている・たいいてい人は疎通性があり言ったらわかってくれるなど8名であった。人に危害を加えることは少ない・そんなに恐くない・怖いあばれるという偏見はなくなったような気がするなど4名。怖いという偏見はなくなったように思うが何故こんなふうに考えるのか理解できないという感じは新しくできた・理解できない部分が多いと思った2名。

以上より「偏見があった」が「わからない」になった学生の変化した内容は優しい心を持った人や思いやりのある人が多い・正常な部分が殆どで普通の人と変わらない・疎通性がある・恐くないなどが多かった。

考 察

実習前に偏見を持っていると考えた学生は82名中69名いた。精神障害者と関わった経験を持たないのに、恐い感じがする、会話にならない、暴力をふるう、考えられない行動をする、危険である、何をするかわからないなどとイメージしていることがわかった。精神障害者を身近に知らないことから、これはおそらく一般の人に近い内容の偏見だろう。岡田は新聞記事の分析をして、精神疾患に関する記事は15年前よりもむしろわかっており、新聞記事で見るとかぎり精神疾患についての偏見はかわっていない¹⁾と述べている。学生は精神疾患や講義を学んでいるにも拘らず精神障害者を危険視するイメージを抱くのは新聞やテレビの事件報道などの情報による影響が大きいのではないかと考えられる。かつて小林美代子が「一人の異常者の為に私達全国の精神病患者が裁かれる。……患者以外人間が千人に一人罪を犯しても、九百九十九人は罪に問われないが、私達は全員直ちに裁かれる。」²⁾と書いているように報道された一人のイメージで精神障害者全体をそのように見してしまう傾向が学生にはあると思われる。

次に、実習前後を比べると変化があったと答えた学生は82名中65名で、その内「偏見があった」が「偏見がない」に変化した学生は40名で一番多かった。つまり、半分の学生が精神科実習によって偏見がなくなったと答えている。その次に多いのが「偏見があった」が「わからない」に変化した学生で21名だった。「偏見がない」になった学生も「わからない」になった学生も実習を通して変化した内容は大体同様であった。それは普通の人と変わらないと感じたことであり、実習前にイメージした偏見内容を否定するものである。更に、精神疾患を理解した内容や、患者の人となりについての内容である。「わからない」になった学生も実習前の精神障害者を危険視する偏見については殆どなくなったと答えていることから、学生の多くは一般の人と同じ偏見はなくなったと考えてよいと思う。

以上のことから精神科実習が学生の偏見に大きな影響を与えていることがわかる。学生は実習で

患者と接触し、実習前にあった偏見内容を否定する事実を目のあたりにすることで偏見はなくなったと思われる。また、学生は実習目標を達成するためにも患者と積極的に関わり理解することから始めなければならない。実習がきっかけとなって患者（精神障害者）に多くの関心を向けるわけはその意味でも実習の果たす役割が大きいのではと考える。患者に関心を向けた結果、症状が苦しみの表現であることを知り、病気は一部分で健康な部分が殆どであることを理解する。そして、患者が病気や将来について真剣に考え悩んでいることを、学生にも気を使い過ぎるような心優しい思いやりのある人達だと理解する。学生が理解したこれらの内容は関心を向けた対象である患者が実習中に示したものである。その患者達の示す事実を知る実習という体験が学生に、患者は自分達と何ら変わりがないと感じさせているのである。実習の目標の一つに、事実を知って患者を理解し人として尊重することをあげていると前に述べたが、多くの学生はほぼその目標を達成していると考えられる。それが延いては偏見をなくすことにつながったと考える。

最後に、これまで述べた実習後「わからない」に変化した学生に加えて変化のなかった学生の中に「偏見がある」7名と「わからない」2名の学生がいる。実習で事実を知り尚学生に偏見が残ることも実態のようである。野田は相変わらず精神衛生に関する関心は低く、身近な問題にはなっていない現状である³⁾と述べているように学生が実習以外に精神障害者への関心を向ける機会が少ないのではないかと考える。また、山田らが精神障害者を危険視することについて看護学生では30%の者が懐疑的である⁴⁾、看護学生は世間体で考えることが多く、偏見なども強く残っているようで、より閉鎖的であった⁵⁾と述べている。更に、町沢らは詳しい調査でアメリカ、イギリスのおよそ30年前の社会的距離に関する偏見調査と比較しても、日本は偏見が強いことがうかがわれた。⁶⁾と述べている。学生が実習で事実を知っても偏見がなくなってしまうのは日本におけるそういった偏見の根強さと関連しているのかもしれない。

結 論

1. 精神科実習前に69名(84.1%)の学生が偏見を持っていた。
2. 実習前の偏見内容は一般的に考えられている精神障害者を危険視するものと疎通性がないといったものが多かった。
3. 精神科実習後、40名(48.8%)の学生が「偏見があった」から「偏見がない」に変化し、21名(25.6%)の学生が「偏見があった」から「わからない」に変化した。
4. 精神科実習後変化した内容として、学生は精神障害者を危険視することはなくなり、精神障害者を自分達とほぼ変わらない普通の人だと理解した。

引用文献

- 1) 小林美代子：髪の花。講談社。東京。65-66, 1971.
- 2) 岡田靖雄：精神疾患患者への偏見をつくるもの(第2報)。社会精神医学12：37-43, 1989.
- 3) 野田和男：精神衛生に関する意見・態度。静岡精衛センター所報：59-66, 1988.
- 4), 5) 山田裕子, 市丸精一：精神障害と社会的態度(3)。住友医誌第11号：34-42, 1984.
- 6) 町沢静夫, 佐藤寛之, 沢村幸：精神障害に対する態度測定。臨床精神医学19：511-520, 1990.

参考文献

- 1) 河村好市：精神障害者の犯罪報道をめぐる「書かれる立場」と「書く立場」。臨床精神医学12：447-451, 1983.